厦门大学出版社
XIAMEN UNIVERSITY PRESS
国家一级出版社
全国百佳图书出版单位

周作人と日本古典文学

潘秀蓉◎著

周作人与日本古典文学

厦门大学出版社 XIAMEN UNIVERSITY PRESS
国家一级出版社
全国百佳图书出版单位

周作人と日本古典文学

周作人与日本古典文学

潘秀蓉◎著

图书在版编目(CIP)数据

周作人与日本古典文学:日文/潘秀蓉著. —厦门:厦门大学出版社,2014.10
ISBN 978-7-5615-5046-5

Ⅰ.①周… Ⅱ.①潘… Ⅲ.①周作人(1885～1968)-日本文学-文学翻译-研究-日文②日本文学-古典文学研究-日文 Ⅳ.①I206.6②I313.06

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2014)第 179066 号

厦门大学出版社出版发行
(地址:厦门市软件园二期望海路 39 号 邮编:361008)
http://www.xmupress.com
xmup @ xmupress.com
厦门集大印刷厂印刷
2014 年 10 月第 1 版 2014 年 10 月第 1 次印刷
开本:720×1000 1/16 印张:18
字数:305 千字 印数:1～800 册
定价:49.00 元
如有印装质量问题请寄本社营销中心调换

序

潘秀蓉さんは，東京外国語大学で一九九七年四月より研究生として、また一九九八年四月からは大学院地域文化研究科において、「周作人と日本古典文学」をテーマとして研究を進め、二〇〇六年三月博士の学位を取得しました。研究生として東京外国語大学に入学してから修士課程を修了するまでの期間、研究指導に当たった者として、この度の博士論文刊行を心より嬉しく思います。

周知のとおり、周作人は、散文作家・翻訳家として、その実兄である魯迅と共に中国近現代文学史に大きな足跡を残した文学者ですが、戦時中の対日協力が問題とされ、中華人民共和国成立以降、中国においては長い間研究されることはありませんでした。八〇年代以降、周作人研究は中国においても盛んになっていますが、周作人の文学活動の中で大きな部分を占める日本古典文学の紹介・翻訳については、日本古典文学にかかわる分野であるということから、これまで踏み込んだ研究が殆どなされておらず、いわば周作人研究の空白の分野となっていました。

潘さんの博士論文は、この空白を埋めるものであり、また、中国に於いて日本文学がどのように受容されてきたのかという問題を明らかにすることにもなっており、極めて刺激的な内容となっています。潘さんは修士論文執筆に際して国会図書館に幾度となく通い、同館所蔵の明治、大正時代に出版された『徒然草』の注釈書67点を調べ、周作人の翻訳と比較・検討し、周作人が参考にした注釈書3点を特定しました。こうした労を惜しまず、実証を重視する姿勢は博士論文においても一貫しています。

本書が多くの人に読まれることを願い、また潘さんには今後もこれまで同様の研究姿勢で研究を進め、周作人研究、日中比較文学研究の分野で成果を積み重ねてくれることを期待します。

（東京外国語大学名誉教授　小林二男）

本書の著者潘秀蓉氏は福建師範大学中文系を卒業されて後、日本に留学、東京外国語大学大学院において、村尾誠一教授の指導のもとに中日比較文学を専攻された俊秀である。潘氏は、文豪魯迅の弟として知られ、中国における日本文学研究の先駆者の一人であり、日本に関する多くの著書・翻訳を世に送って、中国における日本文学日本文化の紹介に力を尽くした文学者周作人の研究を早くから心がけられ、九年に及ぶ留学生活をその研究に邁進された。その研鑽の成果はやがて東京外国語大学に博士論文として提出され、審査員一同の極めて高い評価を得た『周作人と日本古典文学』となって結実した。本書はそれを母胎としてさらに本文に筆を加えて文を練り、周作人、さらには日本文学、日中比較文学に関心を抱く読者を対象として世に送られるものである。その意義は極めて大きい。

中国屈指の知日家、日本文化研究家としての周作人の多大な業績は瞠目に値するものであるが、それは単なる外国文学紹介としての域をはるかに超えたものであって、中国における新たな文学の形成・発展とも固く結びついており、中国近代文学の発展にとっても大きな意味をもつものであった。近年周作人の存在が注目され、中日両国の研究者による研究が進展しつつあるとはいえ、遺憾ながらこれまでのところ、文学者周作人の果たした役割がきちんと認識され、その業績が十分に認知されているとは言い難い面がある。本書の出現はその認識を改めさせるに足る、これまでほとんど未開拓だった領域に新たな視界を開いた独創性豊かな研究である。本書の刊行をもって、中国における周作人研究は一段と伸展を見せるであろう。

潘氏は日本文学研究者、翻訳家としての周作人の活動に着目し、この傑出した文学者にとって、日本文学研究とりわけ日本古典の研究と翻訳がきわめて大きな意義を持っていることを発見した。氏は周作人による日本古典の翻訳をテクストの綿密かつ精緻な分析を通じて、その翻訳の特質を明らかにし、それによってこの文豪の日本文化理解、その日本観のありようなどを描き出すことに見事に成功している。第三章『周作人と徒然草』から最もよく看取できるように、テクストに密着したその精細な翻訳研究は、翻訳というものを通じての比較文学研究の手本となるほどに立派な出来栄えである。

中国の近代文学にとっても少なからぬ意義をもつ、日本古典の翻訳者としての周作人の活動を明らかにし得たことは、中日比較文学・比較文化論

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

の研究においても多大な貢献をなすものと信ずる。画期的な意義をもつ潘秀蓉氏の著書が、日本語を解する中国の研究者、読者に、さらには日本の読者に広く受け入れられ、読まれることを熱望する次第である。本書の内容はそれに十分に応えてくれるはずである。

（東京外国語大学名誉教授　沓掛良彦）

古典文学は、その内容が現代の眼からすれば理解し難いものであっても、現代の倫理にそぐわないものであっても、大きな価値を有している。時の流れの中で消えなかった重みが迫って来る。しかし、古典文学が現代という時代に直接適応する内容を持つどころか、あるべき時代を切り拓いてゆく思想を持つものとして読まれたならば、より幸福な出会いだと言わねばならない。まして、一流の思想家・文筆家に読み取られて、その成果が新しい時代を拓くよすがとなるならば、本当に素晴らしいことだ。それが言語や国境を越えてなされるならば、その古典を生み出した国にとっても誇りである。例えそこに若干の誤読や誤解が含まれていたとしても、それは影響の豊かさに比べて取るに足らぬものにもなるであろう。

この書物で潘さんが描いたのは、まさにそのような幸福である。周作人の手によって読まれ翻訳された日本の古典が、一九二〇年代の中国の近代化の中で、そのような役割を負ったことが実証されている。周作人の翻訳の過程を彼の参照した文献に辿り直し、説得力のある形で、そのことを明示し得たのが本書である。時にその日本の古典は若干の誤読を受けていることもあるが、その誤読の生じる拠り所も実証されている。こうして読まれた日本の古典は幸福だし、周作人という巨人の思想形成の鍵を示すことになった。一見地味な研究ではあるが、その意味する所は実に豊かなものである。

潘さんにとってこうした研究のきっかけとなった論考が、本書に収められた『徒然草』の章である。周作人が翻訳の参考にした書物をつきとめるべく、東京の国立国会図書館に日参し、彼女が日本に留学した時点で刊行されていた『徒然草』関係の注釈書の総てに当たってみるという、根気のいる作業の末に、この論考の基となる修士論文は出来上がり、彼女の研究スタイルも確立した。ともかくも根気よく文献を博捜することによって書

かれたのが本書である。通い詰めた国会図書館を東京で一番好きな場所だと、潘さんは言う。何とも好学の人だ。大学院での指導教授として私がなした事は、そこへ通うことの示唆だけだったと思う。後は潘さんの粘り強い情熱が学を形成させたのである。

中国に帰国した潘さんの拠点は福州大学である。一度訪ねた私も、その好学的な雰囲気に好感を持った。その大学から若い教師が、我々の大学に研究の為に派遣されるが、いずれも熱心な研究者である。また、我々の大学院の若い研究者が、日本語教師として潘さんの元で経験を積ませていただく関係も続いている。その中心に潘さんの存在があることは言うまでもない。最後に、潘さんの次の著書を切望して、この序を閉じたい。

（東京外国語大学教授　村尾誠一）

目　録

序章……1
一、周作人について……1
二、周作人研究の現状……3
三、課題の提起……4
四、研究の意義と方法……6

第一部　周作人の日本古典の翻訳

第一章　周作人における日本古典の翻訳と紹介……11
一、周作人における日本古典の翻訳と紹介……12
二、周作人の日本文化観……15
三、日本古典翻訳紹介の背景と目的……20
四、翻訳の姿勢……25

第二章　周作人と古事記……31
一、周作人の古事記観……31
二、翻訳の背景……33
三、古事記の芸術的価値……35
四、翻訳の姿勢……43

第三章　周作人と徒然草……50
一、徒然草の翻訳……50
二、翻訳のテキスト……51
三、翻訳の姿勢……53

第四章　周作人と狂言……67
一、狂言の翻訳……67
二、翻訳の背景と目的……70
三、周作人の狂言観……75
四、狂言翻訳における作品選択……78
五、翻訳の姿勢……81

第五章　周作人と一茶……93
一、周作人の一茶観……94
二、翻訳の背景……113
三、翻訳の姿勢……117

第六章　周作人と俗謡……132
一、周作人の俗謡観……133
二、俗謡翻訳における作品選択……138
三、翻訳の背景……143
四、翻訳の姿勢……145

第七章　周作人と川柳……160
一、翻訳の背景……161
二、周作人の川柳観……163
三、川柳翻訳における作品選択……168
四、翻訳の姿勢……175

第二部　周作人の日本古典の受容

第八章　周作人の恋愛観・女性観・児童観……183
一、色好み……184
二、色欲……192
三、恋愛観……201

四、恋愛と結婚……206
五、女性観……212
六、児童観……221

第九章　周作人の人生観……237
一、無常感……238
二、隠遁……249
三、芸術的生活……256

終章……270
あとがき……273

序　章

本書は周作人の1920年代における日本古典文学の翻訳活動を全体にわたって綿密に検討することを通じて、中国現代文学者としての周作人の一側面を明らかにすることを目的としている。文学者周作人の日本古典文学の翻訳と紹介、ことにも1920年代における日本古典の翻訳は、中国の新文学の方向を示したばかりか、彼自身のその後の文学的方向を占める意味でも重要な示唆を含んでおり、周作人の文学活動全体を考えるうえで重要な位置を占めている。本書では1920年代の周作人における日本古典文学の翻訳と紹介のあり方を考察し、百年前から繰り広げられてきた日中文学比較論及びこれまでの周作人研究の空白の一頁を埋めたいと考える。

周作人は魯迅の筆名で知られる周樹人の実弟で、現代中国の著名な散文作家、翻訳家、文芸理論家であり、現代中国文学の創出に大きな功績を残した人物である。彼はまた日本と日本文化に深く関わった人物で、中国随一の知日家としても知られている。周作人の思想、文学を理解することは現代中国を理解することでもあり、周作人と日本文学の関係を明らかにすることは現代中国と日本文学の関係を明らかにすることだと言っても、過言ではない。

現代中国において周作人ほど複雑で悲劇的な文化人はほかにいないであろう。その生涯は波乱万丈で、前半は五・四新文化運動の文化的巨人の一人であり、または散文の大家として輝きを放った時期があったが、晩年は漢奸という汚名を着せられて投獄され、その名が現代中国文学史において抹殺された時代もあった。周作人と日本の関わりは、周作人の人生と文学を解読する上で、最も重要な鍵の一つであり、20世紀の日中両国の文化の交流、影響関係の研究においても、それを避けて通ることは到底考えられない。

一、周作人について

周作人は1885年に中国浙江省紹興の古い地主の家に次男として生まれ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

た。家は彼の幼いときに没落した。周作人は六歳から十三歳までの八年間を私塾で四書五経と共に暮らしていた。十六歳の時南京にある洋式の海軍学校（江南水師学堂）に進み、五年間ここで過ごし、その間西洋の現代知識と維新派の思想に触れ、英語を学んだ。在学中に『千一夜物語』の英訳本を手に入れ、「アリババと四十人の強盗」を翻訳し、『侠女奴』と改題して、雑誌『女子世界』に連載した。これは周作人の処女作であった。ついでポーの小説『黄金虫』も訳出した。

周作人は1906年二十一歳の時に、日本留学試験に合格し、当時日本留学中で一時帰国していた兄の魯迅と一緒に日本に渡った。以後五年間東京で留学生活を送った。周作人は最初に留学生会館の補習班に入って日本語を学び、ついで、法政大学の予科を経て、立教大学に入学、英文学と古典ギリシャ語を学んだ。

周作人が日本に渡った時、魯迅は既に医学をやめ、文芸に転じていた。周作人の日本留学の最初の3年間は魯迅と文学活動を共にした。兄弟二人を中心に雑誌『新生』を出す計画を立てたが、挫折した。その後兄弟二人で翻訳を始め、中国の最初の本格的翻訳小説集である東欧の小説の翻訳集『域外小説集』を第二冊まで出した。しかしこれには反響が無かった。1909年魯迅が帰国後、周作人は日本語の勉強に本腰を入れ、ようやくその関心を日本文学、ことに江戸の庶民文学に向けた。

周作人は1911年に日本人妻を携えて故郷の紹興へ帰った。浙江省教育司の省視学を半年、ついで紹興の省立第五中学の英文教員を四年務めた。紹興にいた数年間に、相模屋や丸善から英文や日本語の文芸書物を大量に購入し、雑誌としては、『此花』・『婦人世界』・『学灯』・『白樺』・『郷土研究』・『幼年の友』などを長期間渡って予約購読した。また、この間、紹興の童謡を蒐集し、童話・童謡に関する文章を発表した。

周作人は1917年に北京校長蔡元培に招かれ北京に行き、九月に北京大学文科教授の職に就き、以後ずっと北京に住み着いた。北京大学赴任直後、胡適の言文一致提唱に始まった文学革命運動においては「周氏兄弟」の一人として名を馳せ、文芸理論家、批評家及び世界文学を紹介する翻訳家として活躍し、中国近代文学の創出、中国近代精神の形成に大きな業績を挙げた。1920年代の後半からは、中国文壇の散文の大家として大きな存在となった。その他に、民俗学や文化人類学の導入にも功績を残し、中国民俗

学の先駆としても知られている。

日中戦争の際、陥落した北京に留まり、その上、傀儡政府の教育総署督弁に就任したために、戦後「文化漢奸」として断罪され、投獄された。そして獄を出た後、長い蟄居生活を送り、1967年の「文化大革命」の嵐の中で八十二歳の人生を終えた。彼は晩年数多くのギリシャや日本の古典文学の翻訳作品を遺した。周作人最後の仕事は『平家物語』の翻訳であったが、これは未完成のままで世を去った。

二、周作人研究の現状

本論に先たって、まず中国における周作人研究の状況について一言しておきたい。戦後漢奸と断罪されたことで、1980年代の初頭まで、周作人の名前は中国文学史から完全に抹殺され、周作人の研究も意識的に避けられていた。八十年代以後、改革開放に伴い、周作人の再評価と読み直しが盛んになり始め、周作人研究も活発になってきた。これまでの中国国内における周作人研究は、主にその哲学思想、人生行路、政治的行為、人柄、文学観、散文創作及び文化民俗学などに関する研究である。翻訳家であることや、周作人と日本文学との深い関わりのあることは認められているが、言語上の問題や日本関係の資料の入手などの制約があるため、詳細な考察と論述がなされていないのが現状である。

一方、日本における周作人の紹介と翻訳は既に戦前から始まっており、その著作の日本語への翻訳は以下の通りである。

『北京の菓子』(松枝茂夫訳、1936年8月、山本書店)
『周作人随筆集』(松枝茂夫訳、1938年6月、改造社)
『中国新文学之源流』(松枝茂夫訳、1939年、文求堂)
『周作人文芸随筆抄』松枝茂夫訳、1940年6月、冨山房)
『瓜豆集』(松枝茂夫訳、1940年9月、創元社)
『結縁豆』(松枝茂夫訳、1944年4月、実業之日本社)
『魯迅故家』(松枝茂夫、今村与志雄共訳、1955年、筑摩書房)
『日本文化を語る』(木山英雄訳、1973年5月、筑摩書房)
『日本談義集』(木山英雄訳、2002年3月、平凡社)

また日本における周作人の研究書としては、以下のものがある。

1.『周作人先生のこと』(方紀生編、昭和19年、光風館)

2.『北京苦住庵記——日中戦争時代の周作人』(木山英雄、1978年3月、筑摩書房)

3.『東洋人の悲哀——周作人と日本』(劉岸偉、1991年8月、河出書房新社)

4.『周作人と日本近代文学』(于耀明、2001年11月、翰林書房)

5.『周作人「対日協力」の顛末』(補注『北京苦住庵記』ならびに後日編。木山英雄、2004年1月、岩波書店)

1は周作人の伝記、2、5は日中戦争中の周作人を研究したもの、3, 4は周作人と日本近代文学に関する研究である。そのほか様々な角度から周作人と日本文学との関係を論じた論文があるが、翻訳の視点から周作人と日本古典との関係を論じたものはまだ存在しない。本書はその空隙を埋めるべく執筆されたものである。

三、課題の提起

なぜ翻訳という視点から周作人と日本古典について論じようとするのか、それについて一言しておこう。

まず、周作人は翻訳から出発した作家であり、一生涯その翻訳活動は絶えたことがない。周作人は1904年二十歳時のアラビア小説『侠女奴』の翻訳から、1966年八十一歳で『平家物語』第六巻を脱稿するまで、その文学活動は翻訳で始まり、翻訳で終わり、翻訳活動は彼の全生涯に及んでいる。散文の大家としての周作人は、生涯三千篇余りの散文、四十あまりの散文集を発表した。翻訳家としての周作人は三十冊余りの訳著と数えきれないほどの外国文学の紹介文を残したのみならず、中国の翻訳文学の理論的構築にも多大な貢献をしている。周作人のこの優れた訳業は、文学者周作人を研究するために無視できない、極めて重要な文献資料である。

第二に、周作人には「翻訳の半分が創作である」という独特な翻訳観がある。周作人にとって、翻訳とは創作に劣らないほど、重要な意味をもっていた。松枝茂夫は「周作人—伝記的素描—」において「彼は自分の言はんがために他人の作品を借りたまでである。彼の選択を経た訳文の中には常に、少なくともその当時の彼の人格なり、思想なり、趣味なりがそっく

り表出されている。だから彼はしばしば翻訳を自作の文章と一緒にして一冊の本に収めることにした」(注1) と述べている。これは作家周作人を考察するためにはその翻訳作品の大切さを深く認識しなければならないことを示唆する発言である。

周作人自身の言葉を借りれば、翻訳というものは「文章は自分の手を経たものだし、意味は自分の喜ぶところのものであって、しかも自分には思いつこうにも思いつけず、言いたくも言えなかったもの」(注2) であったからである。1926 年、彼は「生活与芸術」の自序において「集中三篇は翻訳である。しかし、私は、翻訳は半分創作であり、訳者の個性を表すことができると思っている。なぜならば、翻訳の真の動機は完全に訳者と作者との間の共鳴によるものだからである。故に私は訳文も集中に収めることにした」(注3) と翻訳に対する自らの見解を述べている。

周作人は翻訳に対する独自の見解について翻訳活動を進めた。従って、彼の翻訳を論ずることは、彼の創作を論ずることでもあり、周作人研究をする際、欠かすことのできない作業なのである。

第三に、周作人の 1920 年代の翻訳は「趣味から出発するものである」。周作人の翻訳作品には、日本とギリシアの古典文学が最も多く、特に日本文学の翻訳はその訳作の全数の五分の三を占めている。彼の最初の日本文学の翻訳は、1916 年の日本の俚謡の翻訳から始まって、1966 年の『平家物語』の翻訳に至るまで、半世紀を貫いている。日本文学の翻訳は彼の一生の文学活動のうちでも大きな比重を占めているのである。その中でも日本の古典翻訳は近代文学の翻訳より遥かに多い。

周作人は「翻訳を談じる」という文章で、翻訳をその性質または態度によって、職務的、事業的、趣味的の三種類に分け、特に趣味的な翻訳の価値と意義を挙げ、その自発的、創作性に含む翻訳には生命が宿っていると述べている。その趣味的な翻訳について、彼は次のように説明している。

> 所謂趣味的ということは、「訳者の仕事が純粋に彼の趣味から出発している、即ち翻訳される著作に対して、心からの愛着をもち、作者の思想を深く理解し、自分だけで読むのでは惜しい、訳して多くの人に読ませなければ満足できない」(注4) ということである。

周作人の1920年代の翻訳は、編集部から求められたテーマに即するのではなく、純粋に周作人自身の趣味から出発するものであり、自分だけ読んだのでは惜しいから、人にも読ませたいという気持ちによる翻訳であった。従って、この時期の翻訳には彼の思想・趣味などが含まれるのは当然であるし、彼の翻訳の検討することによって、それを解読することも可能である。さらに、彼は日本文学からどのような影響を受け、そしてどのように当時の中国文壇にその影響を与えたかについても考察することができるのであろう。

以上の理由で、本論では翻訳家としての周作人と日本古典文学との繋がり、特にその1920年代前半に翻訳された日本の古典文学作品に重点を置いて、分析・解明したい。

四、研究の意義と方法

周作人が中国語に翻訳・紹介した日本古典文学作品は、上代から近世に及び、ジャンルも詩、劇曲、小説、随筆から、和歌、俳句、川柳、端唄、都都逸にまで及んでいる。その優れた訳業は、周作人を研究するうえで極めて重要な文献資料であると思われる。知日家としての周作人が翻訳した日本古典文学の訳文をテキストにし、周作人が日本古典文学をどのように読み取ったか、どのような影響を受けたかを解明することは、新たな視点であり、日中文学を比較する上で大変意義がある作業と思われる。

近年、周作人研究が盛んになってきているが、周作人と日本古典文学との関わりについての本格的な比較研究はほとんど行われていないのが現状である。翻訳論の視点からの周作人論も存在しない。

本書では、周作人が翻訳した作品、また翻訳する時に用いるテキスト・注釈本の選択、文体、使用する語彙体系などを考察することによって、訳者の趣味、翻訳の風格、時代の好みなどを見出し、それによって、思想家・文学理論家としての周作人、翻訳家としての周作人、また翻訳家としての周作人と後の散文大家としての周作人の間にはどのような関係があるかを実証的に明らかにする。更に、周作人における日本古典文学の受容、周作人の翻訳と紹介によって日本古典が中国の現代文壇に与えた影響も併

せて考えてみたい。

本書は全体を二部に分け、九章を設け、周作人と日本古典文学の関係を究明することにしたい。第一部では、周作人による日本古典の翻訳を考察し、作品の時代順に古事記、徒然草、狂言、一茶、俗謡、川柳の翻訳について一章ずつ詳しく検討する。周作人が翻訳した日本古典作品を中心に、その日本古典の翻訳がどのような契機によって開始され、日本古典翻訳の目的と背景、周作人がその作品をどう見ていたか、彼の翻訳の姿勢を明らかにし、その上で、周作人における日本古典の受容、周作人が中国現代文学の形成と成長に及ぼした影響を見極めることを目指すものである。

第二部では、日本古典の翻訳における周作人の女性観、児童観、人生観及び審美情趣を究明し、翻訳家周作人から随筆家周作人がいかに形成されていったのか、また、周作人における伝統の全面的批判から伝統回帰への思想転換に日本古典の翻訳と紹介はどのような意味と意義を有していたのかを考えてみたい。

第一部の各章では大体以下の手続きを踏みながら考察を進める。

1.原典や翻訳に用いたテキストの調査

翻訳について研究する場合、原典を調査することは当然なことであるが、残念ながら、周作人が翻訳している日本古典文学作品の原典や注釈書などは殆ど明確にされていない。特に一茶の俳句、江戸の俗謡、川柳などについては原句が確定できなければ、それらがどんな時期、時代のどんな作であるか、一茶の俳句、江戸の俗謡、川柳の一般的な特徴をどれくらい反映しているか、周作人がどんな選択目で、どのような翻訳姿勢を取ったか、何を誤訳したか、などが分かるはずがない。周作人の手による中国語訳の水準を評価することもできない。本書ではまず翻訳の原典を博捜することから始めたい。これは極めて困難な作業であるが、十分にやりがいがある作業ではないかと思われる。周作人の訳文と周作人の日記、随筆などによって翻訳の原典また翻訳に用いたテキストや注釈書などを調査し、それを明らかにすれば、周作人研究の一つの空白を埋めることができるからである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com